

7. 身障者の立場を考えた総合学習

— 「福祉マップを作ろう」を通して —

今岡正治

1. 講座の基盤

(1) 講座設定の理由

本講座では、これまでどちらかといえば受け身的な、あるいは間接的な福祉体験から一歩抜けだし、自らの体を使って身障者の立場となって物事を体験していく。健常者にとっては何でもない日常の中に、実は身障者にとっては生活に困る切実な問題をはらんでいることが多い。そういった体験を通して、身障者の方々の気持ちに近づき、福祉の諸問題を提起していきたいと考えた。その目的のひとつとして「福祉マップ」を作り上げるという方法を設定した。自らが実際に体験し、調査したことを基にして、身障者の方々に実際に役に立つ実用的なマップを作り役立ててもらい、また、市内の道路状況などを調査し、提言していく。そういった活動を通してより多角的な福祉への視点が体得できるのではないかと考えた。

(2) 学習活動の工夫

限られた時間の中で効率よく学習を進めるためには、全体の時間設定に配慮しなければならなかった。また、学習形態においても、活動をスムーズに展開できるよう設定していった。

- ① 全体での活動（オリエンテーション）での意義付けを徹底し、活動の意味や、大切にしたい事柄や思いを明確にしていく。
- ② グループでの活動内容を明確にして、一人一人が何をしていくか責任分担をはっきりとさせる。
- ③ 体験を大切にして、グループの中に必ず体験のまとめを取り入れる。
- ④ 遊び感覚ではなく、お互いに信頼しあうことを基盤として、危険のないように十分な配慮をする。
- ⑤ マップとして実際にしよでき、役立つような作品を作り上げることで、これからの主体的な福祉活動への足がかりとしていく。

2. 目標

マップづくりを通して、身障者にとってより生活しやすい生活環境を考え、これからの福祉社会への展望を考える。

- ① スキルの学習……手紙の書き方や電話のかけ

方、インタビューの仕方、礼状の書き方などを知る。

- ② 複眼的視点……自分達のテーマを決定していく。マップづくりの立案段階のグループ協議の中で自分とは違う友達の考え方に気付く。
- ③ 福祉の理解……調査や実地活動の中で、福祉の必要性や意義について考えを深める。
- ④ 強制的視点……訪問先でのインタビューを通して福祉活動に携わっておられる方々の考え方や意見を聞き、自分とは違う考え方をを知る。
- ⑤ 将来を見通して……松江の福祉の現状を把握し、身障者の方々に本当に役立つマップを作成する。

3. 体験を生かした学習計画

生徒の中には、小学校や地域のボランティア活動に参加し、福祉学習を経験してきたものも何人かいる。そのため福祉活動とは何かを漠然と想像でき、ことばとして表すことができる。これは、学習計画の中のイメージマップの結果からも総合的に判断できることである。しかし、そういった生徒の実態をみると、学校や、自治体または施設の方からの呼びかけや公募などに参加して取り組んだ体験が多いことがわかる。総合学習としての今後の中学校での学習や将来に及ぶ生涯学習や社会的問題意識の育成の点から見れば、中学生としてはやはり自らの問題意識を自ら定義し、自分の力でその問題に取り組んでいく姿勢や態度が育成されるべきだと考える。

従って、これまでの福祉体験を基礎にして、自分自身の身の回りにある社会的問題点や福祉対策への提言を探ることで、その過程で体得できる様々な事柄が生徒自身のこれからの「考え・行動できる力」に結びついていってくれるのではないかと期待している。

そこで本講座では、事前のオリエンテーション後にできるだけ多くの自主的な活動の時間を設定した。生徒の作った班毎の課題に添って自分達で計画立案し、依頼文書を書き、課題に近づくように指導した。その際、指導教官は後方からの支援に力を入れ、生徒の活動がスムーズにおこなわれるよう援助してきた。

4. 体験を生かした学習の実際

① 講座別オリエンテーション、講習会

「福祉マップ」を作ることを最終的な目的として集まった生徒たちに、単に便利なマップを作るだけでなく、マップ作りを通して松江市の福祉対策の現状やこれからの課題、公共施設の利用や商店での福祉対策の現状等を知ることによって得られる知識や問題意識を大切にしていこう話した。マップづくりにのみ興味があった生徒たちにとっては、大切な事柄として受けとめてくれたようだ。そのことにより、マップづくりよりももっと自分達ができると思われることを計画していくグループが現れてきた。(グループ毎の活動は後述)

また、講習会では実際にグループ毎に分かれてブラインドウォークや車椅子の扱い方の実地練習をしていった。これは、市内や商店を実際に身障者の立場に立って見るためのひとつの手段として自分達で考え出した方法であった。実際に市内をブラインドウォークしたり車椅子で移動するためには慣れない生徒にとっては危険が伴うので、ここでは介助する生徒は本当に真剣に援助することや、お互いに役割を交代していくことによって、恐怖感の感得と信頼の大切さを感得させた。

② グループ活動の実際

本講座では、次のようなグループに分かれそれぞれに活動した。

A	市内大型店を車椅子で歩き、店内のパンフレットを作る。
B	市内大型店の福祉対策を調査し、現状報告や提言をおこなう。
C	市の中心地をブラインドウォークし、道路状況を調査して提言していく。
D	大型病院に訪問し、インタビューを通して身障者の感じる松江を調査する。また、病院内での施設での具体的配慮を知る。
E 2班	市内の主要な道路を実際に車椅子で歩き、危険箇所や改善箇所を調査し発表する。

活動内容はグループ毎に様々でそれぞれ分かれて市内へ繰り出したわけだが、調査期間の短さを訴える生徒が多かった。2時間ずつを2度に分けておこなったが、グループによってはもう2時間程度は必要だったようだ。また、パンフレットやマップにまとめる段階でも、まとめの作業や作業分担そのものに問題があって時間ばかりを浪費するグループもあり、発表へ持っていく難しさを痛感させられたようだ。

5. 学習の成果と課題

次にあげる生徒の感想や意見は実際に体を使って得た、本音だと思われる。そこでいくつか紹介して、成果と課題に触れたい。

① 現実の課題や問題点に触れたもの

- 点字ブロックの上に自転車が放置されているところがたくさんあった。もともとこの歩道は幅が広いわけではないので自転車が停めてあるせいで余計通りにくくなっている。おまけにここはよく自転車が通り抜けていく。
- (大型商店で) なかなかやりたくてもできない(身障者が) ことが多くあるのでびっくりしました。しかし、案内して下さった店の人がとても親切に対応して下さいました。
- 車椅子の人にとってどういうところが通りにくいのかがよくわかった。
- これからの松江が発展していくためには、歩道の狭さなど障害者の方にとって不便な点を見落としてはならないと思いました。

② 生き方や心情的な感動から

- ことばでわかり合えるのではなく、心でわかり合うことが大切だということを知りました。
- しかし、今僕にできることといったら道で困っている人に手をさしのべることぐらいなものだ。いや、今までそれすらも怠ってきたような気がする。
- まとめているうちにいろんな発見があった。そして、もっと聞きたい事がたくさん出てきてしまった。
- どんな人でも同じ人間なんだということを忘れない。
- 今まで差別や偏見をしてきた自分を反省すると同時にこれからの自分をよりよいものにしていくいろいろなものを学びました。

これらの感想例はごく一部であるが、生徒はこの学習体験を通して、想像以上の貴重な体験や感動を感得したように思われる。それも、福祉に対しての考え方をあらためて思い直すと同時に、これからの自分自身のあり方をも見つめ直すことのできたものであった。中学1年生の段階で、これらの体験を自らの行動で獲得できたことは意義深いものだったと思われる。特に、学習目標であげた、③⑤においての感想が多く、福祉の必要性や意義を身障者の立場になって考えることができたのではないかとと思われる。時間の都合で資料の十分な検討に費やす時間が得られなかったことから、⑤においては実用性に富んだマップと言うところまでは至らなかったが、作成にあたってのノウハウは体得できたと思われる。

今後はこの学習を基礎に新たな知識や体験をふまえてより意義深い提言や行動に高まっていくことを期待している。

(いまおか まさはる・音楽科)